アスペの世界へようこそ。

しらとんまっしー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アスペの世界へようこそ。

【Ｎコード】
Ｎ４２９６Ｙ

【作者名】
しらとんまっしー

【あらすじ】
自分が何者なのかを探す旅は、毎日が波乱万丈です。
自分の居場所は一体どこにあるのか、平穏な日々はいつ訪れるのか？
答えにたどり着くまでには、たくさんの試練と犠牲がありました。
彼女は抱えていたのです、アスペルガーという障害を。

十六歳、高校を中退する。その１（前書き）

アスペルガーという障害を知っていますか？

意外と、自分も当てはまるかもしれませんよ（笑）

十六歳、高校を中退する。その１

今日、私は高校を中退しました。

「本当にこれでいいのか？」と先生は最後までしつこかったけれど、私は絶対に後悔なんてしません。

退学届けを出したあと、私は教室に戻って、自分のロッカーの荷物を全部鞄に押し込んで、授業を受けているクラスのみんなに「お世話になりました」

と挨拶をして退場しました。

すると、後から友達が慌てて教室から私を追って走ってくるのが見えました。嫌な予感がします。

「ごめん。やっぱり私のせいだよね？」と彼女。どこからどう見ても、オタク的な雰囲気を醸し出していて、キモいくせに、やたらと馴れ馴れしい彼女。

私は言葉に詰まって、どう説明したらいいか迷ってしまったので、「後で電話するね」と彼女に言ってその場をやりすごしました。

校門を出た瞬間、私は開放感で踊りだしそうになりました。尾崎豊じゃないけれど、（古い？）自由になれた気がしたのです。

もう二度と、通ることもないかもしれない通学路を歩きながら駅

に向かいました。こんな時間に高校生がふらふらしていたら警察官に職務質問を

されてしまうかも、とドキドキしながら交番の前を通り過ぎたところで携帯電話が鳴りました。

彼氏からの着信でした。私の心臓は、更に高鳴りました。

きっかけになったのは、一昨日の教室での出来事でした。

あの女子高に入学して以来、私の高校生活は苦痛以外の何物でもありませんでした。いじめられている訳でもなく、勉強が嫌いだった訳でもないのに、

何故か学校に向かう途中、毎朝のように駅のトイレで吐いていたのです。多分、あの学校の、あのクラスの人間とは根本的に人種が違ったんだと思います。

違和感による、生理的拒絶反応。そしてこれまた何故か、オタクと呼ばれる部類の人たちのグループに私は属するようになって、知りたくもない

アニメの情報と知識だけが友達より増えていく毎日を送っていたのです。

そして、一昨日の休み時間のこと。いつも通り、アニメのキャラクターをノートに描いて私に自慢げに見せてきた友達に、クラスの一人が笑いながら明らかに

馬鹿にした口調で言ったのです。「絵、上手なんだねぇ。今度は私の顔も描いて見てよ」と、彼女は友達からそのノートを取り上げ、クラスのみんなと

一緒になって笑いだしたのです。

私、そういうのって、ゆるせない性質っていうか、その彼女のことがもともと嫌いだったこともあって、キレちゃったんです。

雑誌のモデルをやっているだか、親が芸能人だかなんだかで周りからちやほやされているけど、赤点ばっかとってるくせに態度でかくてえらそーで。

私はそいつの前に立ちはだかって、「あやまんなよ」って言いました。すると、そいつも、クラスの子達も、ゲラゲラ笑い出したのです。

一体何がそんなに可笑しいのでしょうか？

こんなやつらと、これ以上同じ空間にいたくありませんでした。アニメの絵を描いた友達は、何も言わずに黙ってうつむいているだけです。

やってらんない。

そう思った瞬間、私はそばにあった机を思いっきり蹴飛ばして、教室を飛び出したのです。

それが一昨日の出来事でした。

十六歳、高校を中退する。その2.

娘が高校を辞めたいと言い出した時、俺は、ああ、やっぱりな、と予期していた事態だっただけに心の中はやたら冷静だった。もちろん、予期していたこととはいえ、はい、そうですか、とすぐに認める訳にはいかない。あの高校に一体いくら払っていると思っているのか。入学金だけでも、百万はゆうに超えている。

詳しいことは知らないが、あの女子高は芸能人やら、財界人の間では名の知れた高校らしく、いわゆる頭の悪いセレブの娘達の御用達の学校らしかった。

娘は、幼い頃から集団行動が苦手で、俺が男手ひとつで娘達を育てていることを逆手にとってしょっちゅう学校をさぼっていたようだ。それが、受験の時の内申に影響して、成績の割には金のかかる私立しか進学できないと個人面談で担任の先生に言われ、親としてせめて高校だけは卒業して欲しいと思い仕方なく娘をあの高校に入学させたのだ。

娘に高校を辞める理由は聞かなかった。聞いたところで、どうせ理屈など通っていないのだ。それよりも、今後のことである。高校を辞めてどうするつもりなのか。

高校を中退した人間が、成功した事例はいくらでもある。要は、これから何を成すか、である。中途半端な考えでは社会人にはなれない、という覚悟を娘に問わなくてはならない。娘は無邪気にこう言った。「働きたい。学校に行って勉強しているより、バイトしている時のほうが充実していた」と。

それは学校が楽しくないからそう思えるだけのことで、社会はそんなに甘くない。

まして、十六歳の娘がちょっとバイトを覚えたぐらいで働く楽しさ

を語るなんて百年早い。そう言いたいのを俺はぐっと堪えて、バイト先のスーパーで正社員として雇ってくれそうだという娘の話を辛抱強く聞いていた。「フルタイムで働けば、お父さんにも楽をさせられるし、食費やお小遣いも自分で賄えるから」と必死で俺を説得しようとしている。

だが、俺は調子のいいことばかり言う娘には期待していなかった。ただ、あの高校に支払った大金と、娘の計画性のない行動に心から嘆いていた。

私の家は、いわゆる複雑な家庭、というやつで、母親は私達が幼いころに交通事故で天国に逝ってしまい、それ以来私達きょうだいは父子家庭で今日まで育ってきました。

家族構成は、二つ下の妹と、四つ下の弟、そして私とお父さんです。

私達家族は、新宿の町外れの借家に住んでいました。

母親がいない家庭の長女というと、一般的には母親代わりを務めるべく家事やきょうだいの面倒を見ているというイメージがあるのかもしれませんが、その点において私は紛れもなく例外でした。

私の父は広告代理店の経営者で、それなりの経済力があったらしく、そのおかげで私達は食事の面倒を心配する必要はありませんでした。

我が家から五分歩いた場所に小さな商店街があって、その中に「山藤」という食堂がありました。父はその食堂と個人的に契約をして、私達家族はその食堂に行けばいつでも食事を提供してもらえるようにしてくれたのです。でも、掃除と洗濯は長女である私が最低限やらなくてはならない仕事でした。そうはいうものの、自慢ではないけれど、私はどちらも大の苦手で、いつも父に怒られてばかりでした。

洗濯をし終わったものを干し忘れて何日も洗濯機に放置したり、掃除機をかけているのに何故か部屋が一向に片付かないのです。

やっぱり、母親がいないと、掃除や洗濯のやり方すら教えてもらえない。不便です。

そもそも、長女だからという理由で母親代わりをしなければならないという概念が私にとっては迷惑なのです。そんな私に、父は、「お前にはもう何も期待していない」と言いますが、それはそれで嫌な感じでした。期待されたらプレッシャーだけれど、されなければ寂しいのです。わがままでしょうか？

十六歳、高校を中退する。その3.

私が「山藤」に夕食を食べに行くと、今日も店内は常連客で繁盛していました。
私の姿を見つけた常連客の一人が、声をかけてきました。
とび職のおじさん。いつも通り、瓶ビールでご機嫌になっています。
「今日は一人かい？妹達はまだあそんでいるのかい？」
私は食事を待つ間、おじさんの隣に座り、今日の出来事を話すことにしました。
「今日、学校を辞めてきたんだ。明日からおじさんと同じ社会人だよ。やっぱり人間、
学歴じゃないよねー、おじさんだってそう思うでしょ？」
おじさんは私を見つめてポカンとした顔をしていました。
「それでね、いま、バイトに行ってるスーパーで正社員になろうかと思ってるんだ。
まだスーパーのマネージャーには話してないんだけどさ」
「・・・・・」
おじさんは何も言わず苦笑しているだけだったので、私はなんだか拍子抜けしました。
もっと話が盛り上がるかと思ったのです。
食事が運ばれてきました。今日はさんま定食でした。私は、さんま定食を運んできた
店員に話しかけました。
「今日ね、学校辞めてきたんだ。それでね・・・・」
店員は困惑して、「今、店が混んでいるからあとでね」と言いました。
仕方ないので、私はさんま定食を食べながら明日からのことについて考えてみることにしました。とりあえず、朝は好きなだけ寝てい

よう、と思いました。
明日から学校に行かなくていいと思うと、自然に顔がにやけてきます。山手線に乗りながら、吐き気を堪える日々から開放されたんだ、意味の不明なオタク用語や会話を聞くふりをしなくてもいいんだ。
私はつかの間の勝利感に浸っていました。

「ごめん、やっぱりお前はいい人すぎて、俺にはもったいないよ」
付き合っていた彼氏にそう言われた時、私はその言葉が何を意味するのか理解できませんでした。彼には前から私以外に付き合っている人がいて、私はその彼女の存在を知っていたけれど、(実は、その彼女というのは、私の友達なんです) つい勢いで彼に自分の気持ちを打ち明けてしまったのです。
だから彼が、その彼女には内緒で付き合おうって言ってくれた時は本当に嬉しかったんです。なのに、お前はいい人すぎるから、とは一体どういうことなのでしょう?
さっぱりわかりません。
彼は言いました。「お前には、もっといい人が現れるよ」と。
その時にやっと、彼が何を言いたいのかを悟りました。それって、もしかして、別れの言葉? 胸が締め付けられるように苦しくなりました。
どうして?・・・やっぱり、私より、友達のほうがいいってこと?
そう彼に言いたかったけれど、言葉が出てきませんでした。電話を持つ手が震えているだけでした。私はふられたのです。
要するに、元サヤに戻っていっただけの話なのですが、彼にとって私は結局ただの遊びだったのです。最初からなんとなく分かっていたけれど、でも、もしかしたら私を選んでくれるかもしれない・・・と、淡い期待をしている自分がどこかにいました。

彼は会うたび、彼女の愚痴をこぼしていたし、それに彼女より私のほうが可愛いし・・・どうして彼女のほうを選ぶのか、意味がわかりません。悔しい、と何度も思いました。だって、処女を捧げたのに。

でも、よくよく考えてみると、彼とのデートはいつでもラブホテルでした。

一度くらい、彼女みたいに、ディズニーランドに連れてってもらえばよかった、と今になって後悔してもあとの祭りです。

彼に振られて、悲しい、というより、悔しい、という気持ちのほうが勝っていました。

よりによって、その彼とバイト先が同じだったから最悪でした。

振られた翌日は、さすがに顔を合わせたくなくて、バイトをずる休みしてしまいました。

マネージャーには、電話で、熱があるから休みます、と言ったのですが、散々文句を言われてしまい凹みました。後で気が付いたのですが、今日はポイント五倍デーで、かなり

忙しい日だったのに加え、パートのおばちゃんが三人もやめてしまったばかりで人手が足りなかったのです。でも、ただでさえ別れた彼に会うのが気まずいというのに、今日仮病で休んでしまったことで更にバイトに行き辛くなってしまいした。このままでは、正社員になるという道も閉ざされてしまいます。私は悩みましたが、ふと、今日が、給料日だったことを思い出しました。とたんに明るい気持ちになりました。

銀行、行かなくちゃ。明後日、友達とライブを見に行く約束をしていたのです。

私は、いてもたってもいられなくなり、急いで身支度をして駅前の銀行に向かいました。

銀行でお金をおろしているところを、バイト先の人に見られてしまいました。

「あれ?確か、熱があるから休んだんじゃなかったっけ?」

万事休すです。適当な言い訳が思いつかなかったので、笑ってごまかしました。

マネージャーとは一番の仲良しの彼女は、きっとチクるに決まっています。

正社員の話が遠のいていきます・・・前途多難です。

十六歳、バイトをクビになる。その１.

　おねえちゃんが高校を中退して、おまけにバイトをクビになりました。
正直言って、私はとても迷惑しています。なぜなら、先月おねえちゃんに貸した
一万円もまだ返してくれてないというのに、新しいバイトも決まっていないのに
借金の要求をしてくるし、朝はいつまでも寝ていて邪魔だし、一日中家にいるだけのくせに掃除もしないで部屋を散らかすし。
私はまだ中学生だから、高校のことはよく分からないけれど、お父さんはお金をドブに
捨てたようなもんだ、と嘆いていました。お姉ちゃんはいつもそうです。
何をやっても長続きしないんです。マイペース過ぎて、集団行動についていけないというか、ちょっと周りから浮いてしまうというか・・・自分の姉ながら、何を考えているのか全く読めないし、突然、突拍子もない行動や発言をすることがあって、そのたびに
私やお父さんや、周りの人たちに迷惑をかけてしまうんです。
せめて、もう少し、後先を考えて欲しいです。
高校を中退して、何故かバイトをクビになったお姉ちゃんはどうなったかというと、
バイトの面接に片っ端から落ちまくっているようでした。
私はまだ働いたことがないのでえらそうなことは言えませんが、自分ができそうな仕事を探せばいいと思います。お姉ちゃんは、自分のことがいまいち分かっていないようで、
見ている私が時々苛立ちを覚えるくらいです。
勉強は私よりできるのに、何故そんなことも分からないで仕事を探

していのか、理解に苦しみます。極端に言えば、お姉ちゃんはまるで宇宙人みたい、と思うときもあります。
その場の空気が読めない、話は常に脱線する、冗談や社交辞令が通用しない、そのくせに思い込みが激しくて頑固。お姉ちゃんがあんな調子だから、妹の私がいやでもしっかりものにならざるを得ない訳で、中学生にして人生の厳しい現実に直面している今日この頃でした。お姉ちゃんに貸した一万円は、もう戻ってこないだろうと私はあきらめるしかありませんでした。

夕食を食べに「山藤」に行くと、先にお姉ちゃんがご飯を食べていました。
今日もバイトの面接があると言っていましたが、どうだったのでしょうか？
お姉ちゃんは私を見ると、ニコニコして話を始めました。なにかいいことでもあったのでしょうか？「来月行くバンドのチケット、最前列とれたんだよね、すごくない？」
チケット、と聞いて、私は身構えました。またお金を貸せと言われると思ったのです。
お姉ちゃんは話を続けました。
「今日、職業安定所に行って見たんだけど、けっこう求人あるんだよねー」
「ふーん」
私は適当に相槌を打ちました。求人があったところで、雇ってもらえなければ意味がありません。しかも、仕事が決まっていないのにも関わらず、何故ライブに行こうとするのでしょうか？その神経が分かりません。私は一応、聞いてみることにしました。
「お姉ちゃんさ、そのライブのチケット代あるの？言っとくけど、

私はもうお金貸せないからね」そう言うと、お姉ちゃんはあからさまに動揺しました。

「え？そうなの？あ、でも今月末、前のバイトの給料が入るから・・・大丈夫かな」

なんだか怪しい表情です。これ以上突っ込みを入れると、揉めそうな予感がしたので、私は話をやめました。ご飯はおいしく食べたかったからです。

狭い店内は混雑してきて、席がないために待たされているお客も何人かいましたが、

お姉ちゃんはとっくに食べ終わったというのに一向に動く気配がありませんでした。

店員さんが、ちらちらとお姉ちゃんを見ています。でも本人は気が付かずに、携帯電話の操作に夢中でした。私は仕方なく、急いでご飯を食べるしかありませんでした。

十六歳、バイトをクビになる。その2.

　今日も仕事を探す毎日が始まりました。
受けた面接の数は二桁になっていました。履歴書を書くのも、もううんざりでした。
職業安定所に行くと、タウンページのように分厚い求人があるのに、私に適した仕事を探すだけでも日が暮れてしまいます。
今日は朝から雨が降っていたので、就職活動はお休みにしようと思いました。
正直ちょっと疲れていました。たまにはリフレッシュも必要です。
家にいてだらだらしていたいけれど、父や妹達がうるさいから、どこへ行こうか悩みました。
お金もないので、駅前にできたばかりの漫画喫茶で我慢することにしました。
外に出ると、じめじめとした空気がまとわりついてきました。季節はすでに梅雨で、まるで私の人生みたいだと思いました。
夏が待ち遠しいです。
傘をさしながら駅前に向かう途中、私は誰かに呼び止められました。
振り返ると、前のバイト先のスーパーで警備員をしていた人が私を見ています。名前は・・・思い出せませんでした。
彼は私を呼び止めて、こう言いました。
「急にやめちゃったんだね。どうして？」
私は、嫌なことを思い出してしまい、俯きました。無断欠勤が原因でクビになったんです、とはさすがに言えません。
「ごめん、聞いたらまずかった？・・・あのさ、今、時間あるかな？」
彼は私をカラオケに誘いました。私は暇だと答えました。
「お金はないけど」と言うと、彼は「おごるから大丈夫」と笑いま

した。
カラオケ店までの道を歩きながら、彼は話しました。「前から可愛い子だなって思ってたんだ。確か、彼氏、いたよね？別れたって聞いたんだけど、本当？」
私はなんだかドキドキしてきました。これって、ひょっとして、新しい恋のはじまり？
彼をよく見ると、イケメンではないけれど悪くもありませんでした。歳は十八歳で、定時制の学校に通っているとのことでした。
カラオケ店に着くまでの間、私はあれこれと想像しながら彼の隣を歩いていました。

昼間だというのに何故か私は酔っ払っていました。
ジュースかと思って飲んだら、カクテルだったのです。
彼に尋ねると、なんとかドライバーとかいう飲み物だと教えてくれました。美味しかったので、四杯も飲んでしまいました。
彼は自分からカラオケに誘っておきながら全く歌わずにビールを飲みながら私の歌を聴いているだけです。
アルコールのせいなのか、音楽の音量のせいなのか、頭が痺れてきました。
気持ちがいい・・・・。
歌いながらふわふわと体が揺れて、彼とぶつかりました。よろけていたのかもしれません。
彼は突然、私の体を抱きしめました。タバコと、汗の染み込んだTシャツから男の匂いがしました。
彼は私を抱きしめながら、キスをしてきました。抵抗しようにも、ふわふわした感覚が邪魔をして、体が思うように動きません。
まぁ、いっか。浮気しているわけではないのだから。
彼は酔っている私の耳元で囁きました。「ホテル行こうよ」と。

私は気持ちよさに負けて頷いてしまいました。

警備員の彼にホテルで抱かれたあと、私は朝帰りをしてしまいました。

結局、彼から交際を申し込まれることにはなりませんでした。別れ際、「また連絡するから」と言われただけでした。

家に帰ると、父が鬼の形相で私を待ち構えていました。絶体絶命です。

「お前は何様のつもりだ？お父さんを馬鹿にしているのか？お前、高校を辞めるときになんて言った？

働いて、稼いで、家にお金入れるって言ったよな？なのになんでスーパーの仕事クビになったんだ？」

私は何も言えず、黙って父の説教を聞いているしかありませんでした。確かに朝帰りはまずかったけれど、でも、父を馬鹿にしているわけでも、

偉そうにしているつもりもありません。

「仕事探しに行っているのかと思っていたら酒の匂いをさせて朝帰りか？親をなめるのもいい加減にしろ。

仕事がないなら、せめて家事くらいしたらどうだ？全く、長女の自覚すらないから妹に金を借りるなんて恥ずかしいことができるんだな。

お前みたいな娘はこの家に必要ない。出て行け」

私は血の気が引きました。勘当です。弁解したいけれど、言葉が浮かんできません。

父は冷たい表情で私を見ています。

私はもう、諦めて家を出て行くしか選択の余地はないのだと思いました。覚悟を決めて、家を飛び出しました。

わずか三千円しか所持金がないというのに、これからどうすればい

いのでしょう？
寝不足の頭はぼんやりとしていて、現実についていけそうにありませんでした。
私は家の近くの公園に行き、まぶしい朝日を避けるように木陰のベンチに座りました。
涙が出そうになりながら考えました。なんでこうなるんだろう、と。
親子の縁を切られるほど、私はひどいことをしたのでしょうか？
いくら考えても分かりませんでした。ただひとつ言えるのは、私は家なき子になってしまった、ということでした。

家なき子、彷徨う。その1．

しばらく、公園のベンチで何もせずにただ座っていました。
平日の朝の公園はやたらすがすがしく、平和の象徴の鳩がベンチの周りに群がってきました。
私は歩き回る鳩を目で追いながら、ふと、中学の同級生のことを思い出しました。
半年前くらいに、池袋で住み込みをしているというその同級生のところに中学の友達みんなで押しかけたことがあり、
あの時は住み込みなんて私には関係ないと思っていたけれど、今の自分にはもしかしたら一番ベストな選択ではないでしょうか？
私は自分の思いつきにテンションが上がりました。
仕事もできて、一人暮らしができるのです。一石二鳥、とはまさにこのことです。
眠気が一気に吹っ飛びました。私はベンチから立ち上がると、善は急げとばかりに池袋に向かいました。
確か、その同級生のいる住み込み先の職場は人手不足だったはずです。
同級生の連絡先が分からなかったので、直接彼女を訪ねてみることにしました。
所持金はたったの三千円。とにかく、今夜寝る場所を確保しなければならないのです。
私は足早に歩き出しました。

彼女がうちの工場で住み込みで働くことが決まった時、私は正直言ってとても憂鬱になりました。

なぜなら、私は中学校の頃から彼女のことが苦手だったからです。
彼女は人の話を聞かないくせに、自分の話ばかりして、しかもまわりくどいし意味不明で話のオチがない。
しかも、人か気にしていることや言わなければいいことをわざわざ平気な顔で口にするのです。
身の程知らずというか、デリカシーのかけらもない無神経なところが嫌いでした。
彼女の発言に、一体何人の友達が傷ついたことか。
中学時代、私はかなりのメタボで、ダイエットも空しく体重は増える一方でした。
彼女はそんな私にこう言ったのです。
「ダイエット、挫折したの？」と。
とにかく、そんな彼女と同じ職場になるだけでも憂鬱なのに、同じ屋根の下で生活をしなければならない最悪の事態に、
私は運命を呪いました。
聞くところによると、高校を辞めたので自立したいとのことですが、自立の意味を彼女は何か勘違いしているようにしか私には見えませんでした。
「一人暮らしに憧れていたんだ。自分だけの部屋、欲しかったんだ」
うちの会社の2階は社員寮になっていて、彼女も私と同じく六畳の部屋を与えられることになりました。
まだ何も家具がないからと言って、図々しく私の部屋に来ては寝る時間まで居座っています。
プライベートを邪魔するだけでなく、勝手にテレビまでつけて電気を消費し、挙句の果てに家の固定電話の番号を自分の友達や彼氏（？）に教えて連絡をとっているのです。
文句を言ったところで、まともに理解してくれそうな相手ではないだけに、彼女がすぐにここの仕事をやめるだろうと予想ができたの

でしばらく様子を見ることにしました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4296y/

アスペの世界へようこそ。

2011年11月17日19時01分発行